

## 第 8 章

### 実験プログラムの特徴

「連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する  
人材が育つための学習プログラム」から

葛原 生子

#### 1 はじめに

国立女性教育会館（NVEC）は、平成18年度から3年間計画で「女性関連施設に関する調査研究」を実施し、その最終年に当たる平成20年度に「連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つ」ための学習プログラムを開発した。これは、過去2年間の研究成果を、地域で男女共同参画を推進していく支援者に広く活用できる形で還元するためである。この学習プログラム開発の特徴として、学習プログラムをデザインした後、その具体化のために「実験プログラム」を2地域で実際に実施し、その経過と結果を踏まえてプログラムデザインを改善しモデルとなる学習プログラムを提案するという、プログラム開発自体にPDCAサイクルを取り入れていることがあげられる。本稿の目的は、この学習プログラムの開発過程において重要な位置づけをもつ「実験プログラム」の特徴を具体的に明らかにすることである。

それに先立ち、ここではまず、この学習プログラムの開発および「実験プログラム」と私との関わり、すなわち筆者の立場を明確にし、次に内容構成について述べる。

平成20年度から「女性関連施設に関する調査研究」に、「研究協力者」という立場で参加し、1年間、本学習プログラムの開発と実験プログラムの実

施に携わった。具体的には、平成20年度の調査研究の実施組織である「研究協力者会議」にその一員として参加し、学習プログラムのあり方や実施方策などについて協議した。また実験プログラムにおいては、実際にファシリテーターや学習支援者として、学習プログラム実施の場にも参画した。すなわち、本稿は、専門職の継続教育研究で著名なジャービスの言うところの「実践・研究者 (practitioner-researcher)」的立場でまとめたものである。彼は、実践・研究者とは「自分自身の実践を研究する」実践者であり、「大学の象牙の塔よりもむしろ現場が多く、現代的研究の新たな場」となっている知識社会における、「実践者と研究者の二重の役割を遂行する、新しい種類の実践者である」と述べている〔Jarvis 1999 : xi-xii〕。

以上のような立場を踏まえ、実験プログラムの特徴について、次の2点に焦点づけて考察する。まずその第一は、「研究協力者」として体験したプログラム開発過程の特徴についてである。実験プログラムに携わる全関係者が、計画段階から実施過程、さらに評価段階、すなわち実験プログラムの結果の振り返り、といった全過程に関わるという、プログラム開発のあり方である。このことについて、「様々な連携・協働を推進する実験プログラム」としてまとめる。第二の特徴としては、ファシリテーターや学習支援者として関わった実験プログラム内の「ワークショップ型」学習についてである。

## 2 様々な連携・協働を推進する実験プログラム

### 協働による実験プログラムの開発

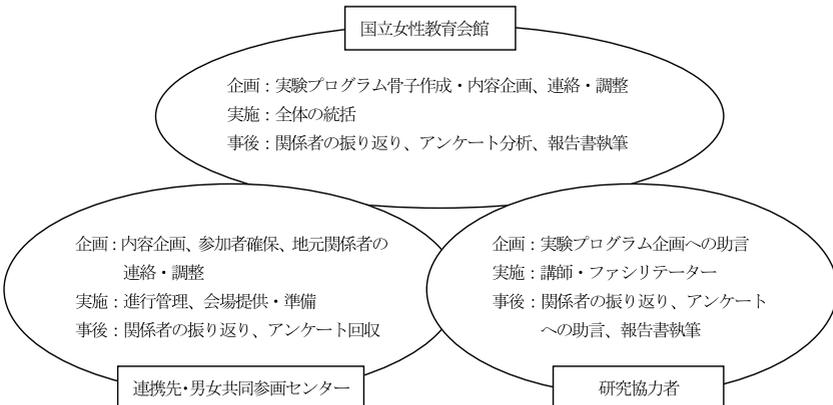
本学習プログラムのねらいは、地域における行政、施設、団体・グループの連携・協働を推進しながら、地域づくりに参画する人材を育成することである。したがって、「連携・協働」はこの学習プログラムの鍵概念である。第一義的には、地域で男女共同参画を推進する核となる女性関連施設・機関、男女共同参画行政、女性団体・グループの三者が実験プログラムの参加者となり、それぞれが男女共同参画の視点に立った地域づくりを推進する人

### Ⅲ プログラム開発

材として育つための学習活動を展開すると同時に、その中で人的つながりをつくりプログラム修了後の実践・活動に結びつくことを目指している。その文脈で、この三者の連携・協働を促進することが、実験プログラムの重要な課題として位置づけられている。

そのこととは別に、研究協力者として参加した「研究協力者会議」などを通して、実験プログラムを開発していく過程自体においても、多様な関係者の「連携・協働」が志向されていることを体験し、「協働によるプログラム開発」がこの実験プログラムの特記すべき特徴の一つであると言える。この「協働によるプログラム開発」の中心となった組織が「研究協力者会議」である。そのメンバーは関連分野の研究者、女性関連施設関係者等からなる研究協力者だけでなく、実験プログラムの連携先である都道府県レベルの女性関連施設関係者と、もちろん主催者である NVEC 職員も含まれている。メンバー全員が集まる会議は平成20年度中に3回開催されたが、第1回目の会議でそれぞれの役割分担が確認された（第1図参照）。

第1図 プログラム開発における「研究協力者会議」メンバーの役割分担



\*平成20年9月25日に実施された第一回研究協力者会議の配布資料を、筆者が一部修正したものである。

全3回の会議の内容は、次のとおりである。

回数	日程	内 容
1	9/25	実験プログラム開発のすすめ方と役割分担、実験プログラムの骨子
2	11/10	実験プログラムのデザイン、2地域で実施する実験プログラムの具体的内容
3	12/24	実験プログラム実施後の振り返り、成果のまとめ方、報告・発表会の内容

また、実験プログラムを実施する地域（静岡県と千葉県）ごとに、その具体的内容やすすめ方について検討するワーキング・グループをつくり、その打ち合わせ会議も「研究協力者会議」とは別に4回開催された。

実験プログラムの企画段階から、実際の実施（各地域で各2日間）において、さらに実施後の振り返りや成果報告まで、プログラム開発の全過程に「研究協力者会議」の全メンバーが、それぞれの役割を具体的にもって参画した。言い換えると、実験プログラムに関わる全員が「研究協力者会議」のメンバーとなり、プログラム開発の全過程に参画するように計画されているということである。このような協働によるプログラム開発は、成人の学習プログラム開発研究において「プログラム開発の相互作用モデル（Interactive Model of Program Planning）」と呼ばれているものと同じとみなすことができる。このモデルの特徴は、事業やプログラム開発は「静的」で「一定の段階が決まっている」ものではなく、絶えず変化する「動的」なものであるということ。ある意味では、その始まりも終わりも定かではなく、関心・関連のある人たちが、それぞれの関わり方をしながら、練られ、創り上げられていく。多様な人々が「企画」「実施」「評価」の全過程に関わりながら、新たな学びの場を共につくっていく－「協創」する－モデルである。その過程で重要なことは、交渉であり、協議であると言われている〔Caffarella 2002〕。

男女共同参画の推進が、地域や地域に住む人々の抱える現実的な課題に対し、課題解決型の実践的活動を中心とした取組、いわゆる第二ステージへの移行が求められている中、本実験プログラムは、その学習プログラムの参加者や内容において「連携・協働」の重要性を強調している。しかし、それだけでなく、その学習プログラム開発自体においても、ここまで述べてきたよ

### Ⅲ プログラム開発

うな協働型モデルを実現しており、多様な関係者の重層的な「連携・協働」を推進するものとなっている。本実験プログラムは、その内容だけでなく、開発方法においても、一つの協働型学習プログラム開発モデルを提示していると言える。

#### 地域で連携・協働を推進するプログラム参加者

本実験プログラムにおいては、プログラム参加者の属性が一つの鍵となっている。すなわち、各地域の女性関連施設・機関、男女共同参画行政、女性団体・グループの三者がプログラムの参加者として指定されている点である。

実験プログラムを実施した静岡県においては、静岡県と参加した7市町村において、この三者が参加し実施された。千葉県においては、各地域の地域づくりの重点分野を絞って実施したこともあり、男女共同参画行政だけでなく、各分野の関係部局からの参加もあった。

実験プログラムへの参加を通して、事後アンケートに「市民・センター・行政職員の三者で作業することにより、実際に体験すること自体が、連携・協働に繋がったと思います」、「2日目に行なった同じまちの三者が課題解決に向けて課題を立て、連携・協働を活かした事業計画案を立てるのも、三者の話し合いの中で、連携・協力しなくてはできないワークで、とてもよかった」という感想があった〔国立女性教育会館 2009：94〕。このことから、学習プログラムへの参加が、三者が会える機会となり、学習過程が連携・協働を体験する場となっていることがわかる。

本実験プログラムは、地域で男女共同参画を推進する多様な関係者が「連携・協働」を体験する機会となる「実践・活動に結びつく学習」(アクション・ラーニング)〔ibid：24-25〕を展開することを意図している。アクション・ラーニング(action learning)は、地域社会など様々な場面で、現実に直面している問題について、その事柄に関連している人たちが、「対話」と「行動」を通して、課題の抽出から、解決方策の検討、その実行と結果の振り返

りまでの過程を共有し、必要な変化を創り出す「なすこと (doing)」を強調した学習のアプローチである。現場においても、このような一連の学びのサイクルを持続することにより、ひとりひとりの学びと変化を生み出すとともに、その集団が学びによってよりよい方向に変化し続ける学習コミュニティとなることをめざしている。また、次々と出現する新たな問題に創造的に対応するための「学習することの学習 (learning how to learn)」といったメタ学習力を高めようとするものでもある。いま、ここにある問題の解決だけでなく、問題解決のプロセスを身につけ、次に起こる新たな問題を解決するための力の開発も意図した、二重の学びを念頭に置いている。

地域を基盤に男女共同参画を推進していくためには、実験プログラムの参加者とした三者を核とする多様な関係者の継続的なアクション・ラーニングが必要であり、実験プログラムは、そのはじまりの一ページ目、すなわち学びの一サイクル目を始動するものとなっている。

### 3 「ワークショップ型」学習

#### 実験プログラムにおける「ワークショップ型」学習の実際

本実験プログラムは、これまでNWECが行ってきたプログラム開発研究を踏まえ、その基本的構成要素を①「男女共同参加推進意識の涵養、方向性・ビジョン」、②「実態・問題・課題把握、分析」、③「実践力＝課題解決」の三要素としてデザインされている。その中でプログラム実施時間の大部分を占める②「実態・問題・課題把握、分析」および③「実践力＝課題解決」の学習活動のほとんどが「ワークショップ型」学習で行なわれている。

男女共同参画についての学び、成人の学びには、参加者を主体とする参加型の学習方法が適切であると考え、NWECの主催研修では、従来から参加型の学習方法を重視してプログラムづくりを行なってきた。その中でも特に、本実験プログラムは「実践・活動に結びつく学習」を目指し、学ぶ人たちの学習への能動的な関わり (attitude, motivation)、参加者同士の関係性

### Ⅲ プログラム開発

(relationship) をつくりながら行なう学習を重視しており、プログラム全体を通して多様な「ワークショップ型」学習を取り入れているのが特徴である。

②「実態・問題・課題把握、分析」の部分では、地域における男女共同参画の実態をデータで読み分析するワークショップ、また地域づくりに参画する女性のロールモデルをワークシートを用いて分析するワークショップ等、これまでNWECで開発されてきた「ワークショップ型」学習が用いられている。

ここでは、それらに加え特に本実験プログラムにおいて③「実践力＝課題解決」の部分で新たに取り組んだ「ワークショップ型」学習の特徴を明らかにしていきたい。最初に実施した学習活動の内容を具体的に紹介し、次にこの学習活動をより有効なものにしていると考えられる3つのポイント「ミニ・レクチャー」「付箋ワーク」「学習支援者」について考察する。

③「実践力＝課題解決」部分の学習活動は、2日間にわたる実験プログラムの最後の約4時間を用いて実施された。この部分のねらいは、次年度以降に向け、連携・協働による地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成することである。学習活動は次に具体的に示すように、2つのパートに分けて実施された。

#### 【パート1】

目標 ①「男女共同参加推進意識の涵養、方向性・ビジョン」および②「実態・問題・課題把握、分析」の学習活動を踏まえ、そこからみえてきた、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる。

#### ワークショップ型学習のすすめ方

時間	ワークの種類	作業内容	担当
20分	ミニ・レクチャー 「地域づくりと連携・協働について考える」	ワークショップの方向づけ ・地域づくりのいま、協働の考え方・実践が出てきた背景、連携・協働のポイント、事例から連携・協働のすすめ方についての説明	ワークショップ全体のファシリテーター
5分	個人ワーク (付箋ワーク)	課題出し ・各自が、これまでの学習から出てきた課題を思い出し、付箋に書き出していく	

時間	ワークの種類	作業内容	担当
35分	グループワーク	課題の集約と取組課題の決定 ・グループ全員で、課題をどんどん出し、できるだけ具体的に模造紙に記入していく ・出てきた課題の中から、緊急性、必要性、実現可能性の3つの観点からみて、各チームで取組む事業につながる課題を立てる ・課題をホワイトボードに記入	ファシリテーター 各グループの学習支援者
10分	全体ワーク	課題の発表・学びの共有（2分×5グループ）	ファシリテーター

## 【パート2】

目標 連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材育成支援の事業計画を作成する。

## ワークショップ型学習のすすめ方

時間	ワークの種類	作業内容	担当
95分 休憩は適宜	グループワーク	事業計画案の作成 ・趣旨・すすめ方の説明 ・事業案の作成（前半40分） 作業する項目：「テーマ」「ねらい」「対象」「連携・協働」 ・事業案の作成（後半40分） 作業する項目：「内容」「効果」 ・まとめ・発表準備（25分） 発表用シート（模造紙で形式は自由）の完成	ファシリテーター 各グループの学習支援者
35分	全体ワーク 個人ワーク（付箋ワーク）	グループ発表（7分×5グループ） ・作成した事業計画案の発表（5分） ・発表していないグループの人は、各グループの発表に対し、コメントを付箋に記入する（2分） ・発表終了後、付箋を各事業計画案に貼りあうことで、意見交換	ファシリテーター 各グループの学習支援者
20分	グループワーク	作成した案の再検討 ・発表を通しての振り返り、また付箋によるコメントを参考にしながら、修正箇所をカラーマジックで記入する	各グループの学習支援者
15分	全体ワーク	修正点の発表（2分×5グループ） ・再検討をした部分を中心に、修正案の発表	ファシリテーター
10分	全体ワーク	コメントとまとめ ・作成された事業計画案、ワークショップについての講評と、今後の地域での展開に向けた助言	ファシリテーター コメンテーター

### 「ワークショップ」型学習を有効なものにするためのポイント

#### (1)ファシリテーターによる「ミニ・レクチャー」

本実験プログラムの「ワークショップ型」学習の特徴は、学習プログラムを構成する各部分の最初に、その学習活動を方向づける「ミニ・レクチャー」を組み入れたことである。ワークショップは参加体験型グループ学習で、講師が一方向的に講義をする承り型学習とは異なる学習形態であり、「ワークショップ型」学習と、「ミニ・レクチャー」すなわち短時間の講義は、一見矛盾しているようにみえる。ただ、ワークショップのような参加体験型学習においても、そこで行なわれる学習活動の意図や目的を確認し皆で共有することは、重要な「導入」部分と考えられている〔中野 2001；182〕。本実験プログラムでは、その「導入」部分において、鍵概念となる「地域づくり」や「連携・協働」などの用語を確認し、次に続く学習活動との関連づけを丁寧に行なうことが学習活動を有効なものにすると考え、あえて「ミニ・レクチャー」と呼び強調している。したがって、「ミニ・レクチャー」は「ワークショップ」型学習の導入部分と位置づけられ、「ワークショップ」型学習の進行促進役であるファシリテーターが一貫して行なっている。

#### (2)個人ワークとしての「付箋ワーク」

本実験プログラムの「ワークショップ」型学習は、「グループワーク」を中心としながらも、その準備としての「個人ワーク」と、全体で学びを共有する「全体ワーク」の3種類のワークを組み合わせて実施している。その中でも、ひとりひとりが自分の経験や考えをまとめて「付箋」に記入する個人ワーク、すなわち「付箋ワーク」を重要な作業として位置づけているのが特徴である。グループで話し合いや作業をする前に、まず自分自身の考えを付箋に書き、グループに提示することは、個人やその個々人の考えを全体の中に埋没させないために必要不可欠な作業である。参加者の事後アンケートからも「付箋を使い書くことで、疑問点や抽象的な言葉もわかりました」と積極的に受け入れられている〔国立女性教育会館 2009：81〕。

また、上記【パート2】の最初の全体ワークであるグループ発表のところ

でも「付箋ワーク」を活用している。発表する人だけでなく、聞いている人たちも他のグループの事業計画案づくりを応援する作業として、発表を聞いて「よかったところ、評価できるところ」をピンクの付箋に、「改善点・疑問点、アドバイス」を青の付箋に記入し、発表終了後各事業計画案に貼りあった。この付箋を使つての全員からの意見や指摘のコメントが各グループの作成した計画案の再検討に役立ち、最後のコメントーターからのまとめにおいても「参加者同士がコメントを出し合うことで、具体的なプランができた」と講評されている〔ibid：70〕。

### (3)グループごとの「学習支援者」

この「ワークショップ型」学習の第三の特徴は、全体を把握し促進するファシリテーター一名に加え、各グループに「学習支援者」が配置されたことである。ファシリテーターは「人と人が集う場で、お互いのコミュニケーションを円滑に促進し、それぞれの経験や知恵や意欲を上手に引き出しながら、学びや創造活動、時には紛争解決を容易にしていく役割」〔中野 2001；146-147〕と言われている。そういう意味では、ファシリテーターも「学習支援者」も基本的には同じ役割・機能である。しかしながら、参加者の事後アンケートに「以前、ワークショップでの学習を行ないましたが、今回のように小グループでそこにファシリテーター（「学習支援者」のこと）がつきワーク方式で行なつたことは初めてでしたが、要領よくクエスチョンを出してくれるので意見が出しやすかつた」「討議をする中で、各ポイントに必要な最小限の助言等をいただくことにより、限られた時間の中で効率よく進めることができた」「迷い、言葉がみつからない時に適切なアドバイスがあつた」という学習支援者に対する独自の評価がみられた〔国立女性教育会館 2009：99〕。ワークショップに一人おかれているファシリテーターは、全体を見渡し、ワークショップ全体を進行促進することが優先されるが、学習支援者は各グループ内の個々の学習者を見てグループの学習プロセスを具体的にフォローできる利点がある。特に、参加体験型学習に不慣れな人が多い場合には、両者がいることによって「ワークショップ型」学習がより有効なものに

### Ⅲ プログラム開発

なると考えられる。

## 4 おわりに

「市民、施設、行政職員の三者で作業することが連携・協働につながった」「聞く、話す、書く、まとめるなど、五感のすべてを働かせて、参加できた。講演会等の受け身の研修、学習に慣れていたので、とても刺激的で、是非、実践につなげたいと思った」〔ibid：資料9-10〕。

以上のような実験プログラム終了後の参加者アンケートの声や、この学習プログラムで作成した事業計画案を地域での実践に結びつけた事例報告等をみると、本実験プログラムはプログラム終了直後のアウトプット（実績）レベルでは、一定の成果をあげたと言えよう。また、実験プログラムを実施したことによって明らかになった改善点を活かしたプログラムデザインと学習プログラム構成案を再提示し、平成20年度の「女性関連施設に関する調査研究」の目的であったプログラム開発を終えたことになる〔ibid：107-116〕。

とは言え、本実験プログラムでつながった三者の連携・協働が地域でどのように実を結び、継続的アクション・ラーニングが展開され、地域づくりに参画する人材の育成につながっているのかという、アウトカム・レベルでの成果は、今後のフォローアップ調査を待たなければならない。

### 引用文献

国立女性教育会館 2009『連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つために』

Caffarella,R.S. 2002 *Planning Programs of Adult Learners* (2<sup>nd</sup>.ed.) Jossey-Bass

Jarvis,P. 1999 *The Practitioner-Researcher: Developing Theory from Practice*, Jossey-Bass

中野民夫 2001『ワークショップ——新しい学びと創造の場』岩波書店

(くずはら・いくこ 広島県立生涯学習センター生涯学習推進マネージャー)